
ここにいる

京(みやこ)

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここにいる

【Nコード】

N7872D

【作者名】

京^{みやこ}

【あらすじ】

あと一步で楽になれる筈の私はどうしてもその一步が踏み出せない。そんな私を救ってくれたのは意外な人だった。上・下の二部構成。

s t a r t i n g o v e r

私の命の恩人はホームレスだ。

言い方は悪いが、社会からつまはじきにされているホームレスに助けられるなんて一体どういう人生を送ってきたんだ？というような人生を私は過ごしてきた。肌はニキビだらけで体も太い。髪の毛も剛毛の為ボサボサで、性格も暗い私は昔から虐め*いじ*の餌食だった。男の子からは「ブス」と罵られ*のの*、女の子からは「終わってる」と言われ続けた。

これからの未来もきつといいことなんかない。だからもう人生にピリオドを打とうと私は今歩道橋の上から飛び降りようとしている。「はあー。」

その歩道橋の上で私は深呼吸をした。

死のうとは今まで何回も思ったことがある。その証拠として手首には切り傷が数本あるが、こんなものじゃ死ねなかった。だから飛び降りるのだ。遺書もバツチり書いてきたし、その方がきつと私を虐めてきた人達に何か影響があるだろう。

それなのに

怖いと思ってしまうなんて。

ライトをつけて走る車をぼけっと眺めながら、私はどうしても歩道橋から飛び降りることが出来ないでいた。何も考えずに飛べば良かったのに、自分が地面に叩きつけられる瞬間を想像してしまい手すりを飛び越えることが出来ないでいる。

あと一歩踏み出せば楽になれるのに。

早く踏み出せ。

そう何回も思いながら私はしばらくの時間をそこで過ごしていた。

「死ぬんなら、今夜は俺に抱かれない？」

立ち尽くしたままどれほどの時間が経ったのだろう。私は突然声を掛けられ、声がする方を振り向くとヨレヨレでボロボロな男の人がそこに居た。

「・・・・・・・・つ・・・・・・・・」

嫌だ。そりや彼氏とか恋人の行為とか憧れたことあるけど、こんな人は嫌だ。

なんて失礼なことを思いながら私はようやく手すりに右足を掛けた。今やつと飛び降りることが出来そうです。

「まだ若いのに、もったいない。」

その男の人は私の行為を止めようとするでもなく、かといって促すわけでもなくそこに座り込んだ。

「俺なんかまだ三十代なのにさ、このザマよ。」

酔っ払っているのか、その男の人は体をフラフラ揺らしながら勝手に話し始める。

「できちゃった婚して、死ぬ程働いてたのに子どもが飛び出してきて避けきれなくて・・・・殺人者になっちゃうわ子ども連れてかみさんには逃げられるわ、どうよこの人生。」

今まで虐められ尽くした私が哀れに思う話なんて、世の中にはどれだけあるのだろう戦争や難民の話だって所詮は他の国の話、実感がイマイチ湧かなくて一瞬の同情だけで終わってしまう。

だけど今、私は初めて会った人の話で心がえぐられたように悲しくなっている。内容を信じたのは男の人の瞳が絶望を知っている瞳だからだ。絶望を味わった人だけがわかる、瞳。

私は手すりに掛けた右足を下ろした。決して死ぬのを止めたわけじゃない。ただ足が痺れてきたからだ。この男の人の話をもう少し聞いたらここから飛び降りる。絶対に。

そう心に誓いながら私は男の人の横に座った。

「原因は年齢的に虐め？」

私は頷いたりしなかったが、男の人にはわかりきっているようだった。

「抱かれる喜びも知らずに死ぬなんて勿体ねえよ。」

「あなたには関係ないじゃないですか。」

ふざけているような男の人に、私は冷たく言葉を返した。

「大人からしたら大した問題じゃなくても、私には大きいんです。友達も居なくて、彼氏すらできたこともなくて、何も楽しくない。何もいいことなんかない。これ以上生きててもいいことなんか、絶対にない。」

息継ぎもせずに一気に言うと、私の目から涙がこぼれてきた。

何で今更？ 虐められ続けた私はもう、辛さで泣くということなるとつくの昔に止めたはずなのに。

ああ、そうか。一気に言葉を吐き出したから体が酸欠になったんだ。だから酸素を求めて勝手に涙が出てきたのだ。辛さとか言う馬鹿馬鹿しい感情のせいなんかではない。筈^{はず}。

「死ぬ勇気があるなら何でも出来るさ。虐め返す事だって、綺麗になつて見返してやる事だって。」

そんな訳ない。

今まで虐めてきた人に反抗したことがあった。でも、虐めはもつとひどくなった。

綺麗になつてやろう、って思ったことだってある。でも、結局ダイエツトとか上手くいかなくて挫折した。

私は何も出来ない。

もう死ぬことでしか救われないのだ。

「おじさんもこつから飛び降りようとしたけど、怖くて無理だったな。地面に叩きつけられる瞬間を想像しちまってさ。」

自分と同じ事を想像した人が居ることにビクリして私は涙が止まってしまった。

「その時、今の仲間に声を掛けられてさ。こつから見える公園に今も居るんだけど、なんかそのまま踏みとどまっちまって結局今に至

るのさ。」

男の人が歩道橋の手すりに背もたれると、その格好にはどう考えても不釣り合いなネックレスの青い石が月明かりに反応してきらっと光った。

「今日はもう帰りな。泣く元気があるなら、生きていく元気がある証拠だよ。」

一度は止まった筈の涙がまたこぼれてきた。それと同時に嗚咽^{おえつ}までし始めた私の頭をその男の人は優しく撫^なで始める。

どうしてこの男の人は私に優しくしてくれるのだろう。見た目も性格も、全然可愛くない私に優しくする理由なんて見付からない。目の前で死なれたら気持ち悪いだけ？今暮らしているという公園の近くで事件が起こって欲しくないだけ？それともただ女に優しいだけ？

わからない。でも、私はこの男の人が言う通り家に帰ろうと思った。生きたいなんて今は思えないけど、確かに死ぬ勇気があるならなんだって出来るかもしれない。

「よければ、公園にも遊びに来てね。」

撫でながら男の人が行った言葉に、私は泣きながら頭の中で考えた。この男の人が居る公園におにぎりを作って持って行き、一緒に食べている図。

ありえない……

ぶっ

「？」

「あはははは。何？何するの？公園に遊びに来てって。」

おにぎりを食べるだけでなく、この男の人と砂場で遊んだりブランコに乗ったりすることまで考えると私はどうしようもなくおかしくなった。

「ホームレスをなめちゃいかんよ。公園を熟知しているからかくれ

んぼは得意だ。」

「え？ 普段仲間とかくれんぼしてるの？ あはは、変。」

この男の人と同じ様な人達が数人で真剣にかくれんぼをしている姿を考えて私はまたおかしくなって吹きだした。

「泣いたり笑ったり、忙しいお嬢さんだな。」

私はその一言にハツとした。 本当だ、今かなり笑っていた。

「腹の底から笑う元気があるなら、泣く時同様生きていく元気がある証拠。」

「……うん。」

この男の人が言うとかかなり説得力がある。 きっとここで同じ気持ちになったことがあるからだ。

私はよろよろと立ち上がった。

「一つだけ、聞いてもいい？」

「何？」

「そのネックレス……」

「これ？ 昔かみさんにあげたヤツ。 指輪嫌いだったからさ、結婚指輪の変わりにこれあげたんだ。 家出て行く時に置いてってさ。」

懐かしそうな目で男の人が石を触る。 きっとまだ奥さんのことを想っているのだろう。

「何か捨てれなくて。」

私は何と言葉を返していいのかかわからず、ただ困惑の表情で男の人を眺めた。 それに気付くと男の人もち上がり、私の頭をもう一度撫でた。

「気をつけて、お帰り。」

私はまた泣きそうになって無言で回れ右をし、歩き始めた。 だが、数歩歩いて立ち止まった。

「ありがとう。」

少し振り返って小さい声でボソツと呟くように言ったが、ちゃんと男の人の耳に届いたらしく男の人はニッコリと笑った。

「またね。」

男の人が笑顔で、私に挨拶をしてくれた。私はそれに返事をする
ことなく、また無言で歩き始める。

また会う日が来るのだろうか。公園に居るといっても、いつもと
は限らない。より住みやすい住処すみかがあればきつとそっちに移動して
しまふのだろうし、狭いようで広いこの世界で今日のように偶然会
うということは皆無に等しいのではないか。

だけど私はこの言葉が嬉しかった。友達も彼氏も居ない私に“ま
たね”という言葉を掛けてくれる人なんて居ない。だから、すごく
嬉しかったんだ。

これから何をしよう。どうやって生きよう。

とりあえず疲れたから思いっきり眠ろうかな。それから考えれば
いいかな。

帰り道、一人でとぼとぼ歩きながら私はこれからの自分を考えた。
明るい未来なんてやっぱり考えられないけど、とりあえず生きてい
こうと思う。

おじさん。私、おじさんのこと忘れないよ。

怖いだけじゃなく、私が歩道橋から飛び降りられなかったのは止
めてくれる誰かを待っていた。絶望を感じながら、こんな私でも生
きていていいのだと言われることを心のどこかで期待していたのだ。

それをしてくれた私の命の恩人。

絶対に忘れない。

b r i g h t d a y l i g h t

「話聞いてくれてありがとう。」

「どういたしまして。」

私は友達の愚痴を明け方まで聞いた後、バイト先へと向かい始める。歩道橋から飛び降りようとした日からもう三年の月日が経っていた。

あれからとりあえず家に帰った私はそれから半日以上眠り、起きてから必死にそれからのことを考えた。

コツ コツ コツ

バイト先に行くまでに例の歩道橋を通らなくてはいけない。階段を上りながら私はあの日からのことを鮮明に思い出す。

コツ コツ コツ

起きてからたまたまつけたテレビで整形美人の特別番組が流れており、単純な私は自分に残された道がもうこれしかないと思った。しかし先立つもの、つまりお金がなければ整形できない。だから私は無我夢中で働いた。学校も辞め朝から晩まで働き通した。

すると私にどんどん変化が訪れた。

家に帰るとすぐに眠っていたので夜中の間食がなくなり、そのおかげからか顔のニキビが減り体重も下がり始めた。同じ場所で働いているお洒落な大学生の人に感化されてファッションや化粧なんかなにも興味を持ち始めた。

そして、働いてお金を稼ぐという大変さがわかった私は折り合いの悪かった両親に感謝の気持ちを持ち始めた。

「あれからもう三年かぁ。」

あの日と同じように歩道橋の真ん中で立ち止まり、道路を走っている車を見下ろしながら溜息をついた。

「お姉さん一人？お茶でもいかない？」

「ごめんなさい。人と待ち合わせしているのです。」

突然若い男の人に声を掛けられたが私は嘘でやんわりと断った。

男の人はあつさりと引き下がり、今度は階段ですれ違う女の人に声を掛けている。とりあえず誰か引つかければラッキーという感覚なのだろう。

私の肌にはまだニキビも、そしてニキビ跡もあるが化粧をすればそれ程目立たず、細身とは言えないが服のサイズも小さくなった。

憧れていた友達や、実は彼氏なんかもできた。さっきみたいに声を掛けられることも、ごくたまに。

整形することなくありのままの私だ。世界レベルで見ると決してランクが高い訳ではないのだろうが、外見が変わった自信からかう整形しようとは思わなくなった。

「不満なんてない筈なのになあ。」

私はまた溜息をついて歩道橋の手すりに手を掛けた。

昔あれ程憧れていた現実を手に入れた筈の私は、心のどこかにぽっかりと穴が開いているようだった。

「何が足りないんだろう。」

まだ何かを望んでいるのだろうか。

どうして人間はこうも欲深いのだろうか。一つ願い事が叶うとまたそれ以上のものを求めてしまう。

チャッチャララー

携帯電話を開くとメールが一件届いていた。さっき話を聞いていた友達からだ。

『いつも話聞いてくれてありがとうね。今思い出したんだけど、借りたDVD返し損ねてたっ。また次のバイトの時には絶対に返す

ね！では今からバイト頑張つてね。」

可愛い絵文字がたくさん使われたメールにすぐに返信すると、私は心の引つ掛かりが何か少しわかった気がした。

“いつも”

この友達が言う“いつも”とは私たちが出会ってからだ。体重はまだそれ程減つてはいない頃だが、心が変わり始めてからの私。自殺しようとしていた日から前の私じゃない。

友達も彼氏も、ごくたまに声を掛けてくる人の誰もが以前の私を知らない。

もし、知ってしまったら？ニキビだらけで、今よりずっと太つて性格も後ろ向きで、虐められてた頃の私を知っても友達の間で居てくれるのだろうか。恋人の間まで居させてくれるのだろうか。」「って何後ろ向きなこと考えてんだろ。」

中身はそう変わっていないらしい。何かあると私はすぐにうじうじしてしまう。

「バイト、遅れちゃう。」

とり憑かれたかのようにそこに佇^{たたず}んでいた私はようやく手すりから離れて歩き始める。

コッ

「お嬢さん、もう行っちゃうの？」

足を一步前に踏み出した瞬間にまた声を掛けられた。今まで一日に二回ナンパされたことはないのに。新記録か！？

と、一瞬思ったがそんな考えはすぐに蹴散らし勢いよく私は振り向いた。聞き覚えのある声だったからだ。

「いい女になったなあ。」

振り向いた先に居たのは私が思った通りの人だった。

私は怖かった。やっと掴んだこの幸せをいつか失ってしまうので

はないかと。だから昔の私を知られなくなかった。

でも、本当はありのままの私を受け入れて欲しい。認めて欲しい。

心のどこかでずっとそう思っていた。

「よくここまで頑張ったな。」

おじさんの言葉に、私は視界が滲んできた。

昔の私を知っている人がここにいる。

努力を褒められる為に今まで頑張ってきたんじゃない。だけど、その一言がたまらなく嬉しい。

「おじさん。」

「ん？」

私は満面の笑みでおじさんの顔を見た。

私ね、今生きてて良かったと思ってる。おじさんもあの時そう思ってたんでしょう？家がなくても、死ななくて良かったって。そして私もきつとそう思うことがわかってたんでしょう？

過去を乗り越えて、今の私がここにいる。

それだけでもう充分に幸せなのだ。

何も言わない笑顔の私は傍^{はた}から見ればかなり怪しいだろう。でもおじさんは私の次の言葉を待ってくれている。

おじさんの首元で、男の人には不釣り合いなネックレスの青い石が朝日に反射してきらっと光った。

b r i g h t d a y l i g h t (後書き)

お粗末さまでした。

再会したおじさんがさらにボロボロでヨレヨレになっていたか、全然変わっていなかったか、それとも・・・皆さん各々で想像してみてくださいね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7872d/>

ここにいる

2010年10月8日15時15分発行